

人々のマスク着用行動に新型コロナウイルス感染症がもたらす影響 についての研究

草野裕紀^a 西野魁人^b

要旨

本研究ではアンケートを用いてマスク着用の条件や環境、そして社会規範の影響を分析した。仮説として以下の3点を立てた。(1) 感染対策ではなく社会規範によってマスクを着用している人がいる。(2) 屋外より屋内の方がマスク着用の社会規範が強くとして働く。(3) 個人の属性や選好がマスク着用傾向に影響を与える。

結果として、他人がいる場合にはマスク着用者が有意に増え、屋外よりも屋内のマスク着用率の方が高いことが示された。回帰分析では他人が存在することにより女性や高齢層がマスク着用を変える傾向が強いことが確認され、社会規範の影響が強いと考えられるが、他人が存在しない場合も着用する割合が多いことに留意する必要がある。

JEL 分類番号： D82, I10, I18

キーワード： マスク, 社会規範, 新型コロナウイルス感染症

*なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。本研究は、大阪大学大学院経済学部研究科の倫理委員会の承認を得て行われている(承認番号 R51128)。

^a 大阪大学経済学部 u496611j@ecs.osaka-u.ac.jp

^b 大阪大学経済学部 u817316h@ecs.osaka-u.ac.jp

1.はじめに

2023年5月、政府は新型コロナウイルスの感染症法での分類を季節性インフルエンザ等と同じ5類に変更した。これに先立ち同年3月から、厚生労働省はマスクの着用は個人の判断とした。また、2022年5月以降は屋外または会話がないうちでの屋内では、マスクの着用を原則不要としていた。では、人々のマスクの着用は一体どのように変化したのだろうか。肌感覚では、マスクの着用は当然のことではなくなったように感じる。しかし実際には2023年5月以降も屋内・屋外ともにマスクの着用をしている人は少なくなかった。

本研究では、感染拡大のリスクが弱まった中でのマスク着用には社会規範が影響していると考え、アンケートをもとに人々がマスクを着用する条件や環境を明らかにし、社会規範の影響を分析した。

2. 仮説

本研究では、以下の3つの仮説を立てた。

【仮説1】 感染対策ではなく、社会規範によってマスクを着用している人が存在する。

新型コロナウイルス感染症の流行を経て、マスクの着用は感染拡大を防ぐための社会のルールとして引き続き残っており、たとえ感染リスクがなく、マスクの着用が必要ない場面においても、社会規範に影響されマスクを着用し続けている人が存在すると考えた。

【仮説2】 屋内では、屋外以上にマスクを着用すべきという社会規範が強く働いている。

マスクの着用義務は、屋外から屋内へと段階を追って解除された。2022年3月まで、屋外ではマスクの着用義務がなかった一方で、屋内では着用義務が続いていた。このように、屋内は、屋外よりもマスク着用義務が長かったため、社会規範もより強く残っているのではないかと考えた。

【仮説3】 個人の属性や選好は、マスクの着用傾向に影響を及ぼしている。

前年の研究では、人々の属性や社会的選好が社会規範によるマスク着用有意に影響を与えるという事実は見られなかった。しかし、同研究でのアンケート回答者は大阪大学の

経済学部生が主であり、データに偏りがありサンプル数も少ない。本研究では、大規模な調査を行うことで、社会的選好や男女差に加え、年齢層や地域によって社会規範によるマスクの着用への影響に有意な差が確認できるのではないかと考えた。

3. データ

3.1. アンケート実施の概要

人々がどのような条件でマスクを着用するのか、社会規範はマスクの着用にどのように影響を与えるのか調査するため、オンラインアンケートを行った。2023年12月5日から12月8日までを回収期間とし、回答者は全国在住の満20~69歳の男女2500人である。マスクの着用に関する設問に加えて、回答者の基本属性、社会的選好を質問した。

3.2. 回答者の属性

回答者の属性は次の通りである。

表1 回答者の構成

年齢	20代	30代	40代	50代	60代				
	500	500	500	500	500				
性別	男性				女性				
	1250				1250				
居住地 域	北海道	東北	関東	北陸	中部	近畿	中国	四国	九州
	250	250	427	250	281	292	250	250	250

3.3. 質問票

仮想的な状況下での人々のマスク着用行動を見る質問や、人々の選好を見る質問を作成し、着用率の違いについて調べた。着用行動に関する質問は表2にまとめている。社会的選好に関して、正の互酬性および負の互酬性については Dohmen et al. (2009)、一般的信頼については金澤(2013)のアプローチに従って質問・評価を行った。

表2 マスクの着用行動に関する質問票

質問①	今、あなたは屋外にいて、片側二車線の大きな車道沿いの歩道を、一人で歩いています。あなた側の歩道には、あなた一人しか歩いていません。一方で、
-----	---

	あなた側とは反対側の歩道には、あなたと同じ地域に住む人たちが大勢で歩いているのが見えます。このような状況のとき、マスクを着用しますか？
質問②	今、あなたは屋外にいて、片側二車線の大きな車道沿いの歩道を、一人で歩いています。あなた側の歩道には、あなた一人しか歩いていません。さらにあなた側とは反対側の歩道には、誰一人歩いていません。このような状況のとき、マスクを着用しますか？
質問③	今、マスクをしていないあなたは、換気の完全に行われている新幹線の右端（窓側）に座っており、もう一人の乗客は左端に座っています。このような状況の時、あなたならマスクを着用しますか？
質問④	今、マスクをしていないあなたは、換気の完全に行われている新幹線の右端に座っており、その車両にあなた以外には誰もいません。このような状況の時、あなたならマスクを着用しますか？
質問⑤	スーパーマーケットや百貨店で、人と人の間の距離が2メートル以上確保されている状況を想像してください。この時あなたはマスクを着用すべきだと思いますか。
質問⑥	質問⑤に対して、このアンケートを回答する人のうち約何割の人が「マスクを着用すべき」と回答すると考えますか。

4.分析結果

4.1. 仮説1

質問①, ②では屋外のケースで他人が存在する場合と存在しない場合にマスクを着用するかを調べた。その結果、他人が存在する場合は 32.5%、存在しない場合は 23.8%の人がマスクを着用すると回答し、その差は 8.7%ポイントであった。

質問③, ④では屋内のケースで存在する場合と存在しない場合にマスクを着用するかを調べた。その結果、他人が存在する場合は 58.0%、存在しない場合は 29.5%の人がマスクを着用すると回答し、その差は 28.5%ポイントであった。

T 検定を行うと、どちらの平均の差も 0.1%水準で有意となり、他人が存在する場合は、存在しない場合に比べマスクを着用する人は有意に増えることが示された。

質問⑤, ⑥では、十分な距離が確保され感染リスクの少ない屋内でマスクを着用すべきだと思う人の割合とその予測値について質問した。その結果、実際に着用すべきだと答え

た人は 54.0%で、その予想の平均値 48.5%よりも有意に大きくなり、マスクを着用すべきだと考えている人の割合は過小評価されていたことがわかった。

4.2. 仮説 2

質問①と③、②と④の比較により、リスクのない状況で他人の存在の有無が同一である場合の屋外と屋内という違いによるマスク着用率の変化について同様に T 検定を行うと、どちらも屋内の方が有意にマスクの着用率が高かった。

4.3. 仮説 3

仮説 3 について分析するため、個人に関する属性や選好を説明変数とする重回帰分析を行った。ここでの被説明変数は周りに人がいないときはマスクを着用せず、周りに人がいれば着用する、すなわち「社会規範によるマスク着用」を行うかを示すダミー変数である。また、「三大都市圏」は埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、愛知県、大阪府とする。

表 3 社会規範によるマスク着用を被説明変数とした回帰分析

	社会規範によるマスク着用率の重回帰分析			
	Dependent variable:			
	屋外		屋内	
	(1)	(2)	(3)	(4)
女性	0.033*** (0.012)	0.031** (0.012)	0.130*** (0.018)	0.120*** (0.018)
年代	0.007 (0.004)	0.007* (0.004)	0.051*** (0.006)	0.047*** (0.006)
三大都市圏	0.009 (0.015)	0.006 (0.015)	-0.026 (0.022)	-0.029 (0.022)
正の互酬性		-0.008 (0.017)		0.083*** (0.026)
負の互酬性		0.006 (0.018)		-0.030 (0.027)
一般的信頼		-0.010 (0.014)		-0.022 (0.021)
健康意識		0.037*** (0.013)		0.025 (0.020)
Constant	0.053*** (0.019)	0.045** (0.020)	0.027 (0.028)	0.001 (0.030)
Observations	2,500	2,500	2,500	2,500
R ²	0.004	0.008	0.046	0.052
Adjusted R ²	0.003	0.005	0.045	0.049
Residual Std. Error	0.296 (df = 2496)	0.296 (df = 2492)	0.444 (df = 2496)	0.443 (df = 2492)
F Statistic	3.507** (df = 3; 2496)	2.694*** (df = 7; 2492)	40.268*** (df = 3; 2496)	19.489*** (df = 7; 2492)

Note: *p<0.1; **p<0.05; ***p<0.01

表 3 は屋外、屋内における回帰分析の結果である。この結果、女性は両方とも、年齢の高い人は屋内においてのみ社会規範によりマスクを着用する人の割合が有意に高くなることがわかった。また、正の互酬性が高いと屋内において同割合が高くなり、健康意識が高いと屋外において同割合が高くなることもわかった。

5. 考察

はじめに、仮説1の分析結果から屋外、屋内ともに、感染リスクがない状況下で他人の有無でマスクの着用率に有意な差があることがわかった。これから、マスクを着用すべきという社会規範が依然として一部残っており、マスクの着用が促進されていると考えられる。一方で、マスクを着用すべきだと考えている回答者の割合を予想した値は、実際にマスクを着用すべきだと回答した人の割合より少なく、マスクを着用すべきだと考えている人の割合を過小評価していた。このことから、マスクの着用が当然ではなくなったという理解が広まったのではないかと考えられる。

次に仮説2について、屋外から屋内へとマスクの着用義務が解消されたことで、屋内と屋外ではマスクの着用に対する意識に差があると考えられる。また、マスクの着用には他人の存在が影響していると考えられる。他人がいることによるマスクの着用率の増加量は屋外よりも屋内の方が有意に大きかった。ここから、屋内の方が他人の目を意識する人が多く、社会規範がより強く残っていることが示唆された。

最後に仮説3の分析結果をもとに、他人の存在によってマスクを着用する要因について考察する。表3から、女性や年齢の高い人は他人の有無でマスクの着用率を変えやすく、社会規範によるマスクの着用率が高いことが考えられる。しかし、マスクの着用率を被説明変数とする回帰分析でも同じ傾向が出ており、女性や年齢の高い人が、他人の有無によってマスクの着用を変えることが多いという傾向は社会規範によるものだと断言できない。

今後の展望として、どのような人々がなぜマスクを着用するのかという部分に着目し、具体的な行動に至るまでのプロセスを明らかにすることで、マスクを着用させたい場面や、外すことが推奨される場面で適切な対応が取れるよう調査を行っていきたい。

6. 引用文献

Thomas Dohmen, Armin Falk, David Huffman and Uwe Sunde. (2009). "HOMO RECIPROCAN: SURVEY EVIDENCE ON BEHAVIOURAL OUTCOMES". *The Economic Journal* 119(536): 592-612.

金澤悠介 (2019) 「一般的信頼についての質問は何を測定しているのか? ——潜在クラス分析をもちいたアプローチ——」 『社会学年報』 48 95-113

Sun Youn Lee, Shusaku Sasaki, Hirofumi Kurokawa, and Fumio Ohtake. (2022). "The school education, ritual customs, and reciprocity associated with self-regulating hand hygiene practices during COVID-19 in Japan". *BMC Public Health* 22(1):1663